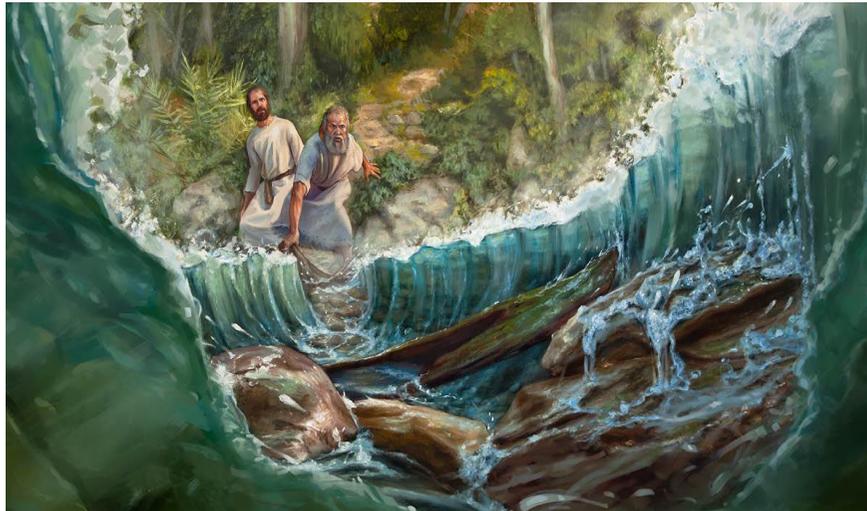


預言者エリヤの後継者エリシャは、モアブへの勝利を預言しました(3章)。困窮の未亡人の家の油を満たすことに関わりました。また、シュネムの女の配慮に応じて、与えられた子の癒しのわざに関わりました(4章)。さらに、ツアラアトに罹患していたアラムの將軍ナアマンが癒されることにも関わりました。その時、エリシャは貢ぎ物を受け取りませんでした。ここに彼の真骨頂があります。



### 1. 預言者仲間の住む場所(1～2節)

①住む場所が手狭に(1)「預言者のともがらがエリシャに、『ご覧のとおり、私たちがあなたといっしょに住んでいるこの場所は狭くなりましたので、』」預言者の仲間の一人が、エリシャに申し出たのです。彼らがギルガルと思われる場所の家が狭くなったというのです。エリシャの周りには、志を同じくする主の働き人が集まっていたのです。そして、仲間たちが増加して、彼らが住んでいる家は手狭になっていたのです。

②木を伐り出し(2)「『ヨルダン川に行きましょう。そこからめいめい一本ずつ材木を切り出して、そこに、私たちの住む所を作りましょう。』」といって、」彼らの提案はヨルダン川に行って、その周辺にある木を切り出して、改めて人々が住む家を建設するというものでした。新改訳2017年度版では、それまでの「材木」という言葉を、「梁にする木」と訳しなおし、て、わかりやすくなりました。めいめい一本ずつ、切り出すのです。それを梁とする木とするのです。そして、ヨルダン川周辺に預言者の仲間たちが起居する場所を造ろうというプロジェクトでした。

③エリシャの同意(2)「エリシャは『行きなさい』と言った。」エリシャは霊的指導者でありましたが、具体的な問題について、細かに関わっていたわけではありません。北のサマリヤ周辺や、カルメル山を周辺でも働きました。備えられた場所に住んだのです。その時々、導きに従って、歩いて来たのです。そこで今、仲間たちがそのような提案を出して来た時も、それを否定はしませんが、その旗振りをするということでもありませんでした。彼らには「行きなさい。」と伝えたのです。

### 2. エリシャも木を切り出しに(3～4節)

①エリシャへの促し(3)「すると、そのひとりが、『あなたもどうか、思い切ってしもべたちといっしょに行って下さい。』』と言ったので、」すべてを任せるつもりでしたが、預言者仲間のひとりが「あなたも一緒に行ってください」と願ったのです。「思い切って」とありますが、「ぜひ」といった意味です。仲間のひとは、主に促されてこの願いを出したのです。

②ためらわずに (3)「エリシャは、『では、私も行こう』と言って、」木の切り出しに共に行くことを、促されたエリシャはためらうことなく、「それでは、私も行こう」と言ったのです。主が導かれる時には、御心に逆らうような思いは生じないのです。積極的な思い、平安があるのです。エリシャははっきりと主からの促しと確信したのでしょう。

③ヨルダン川近くの林 (4)「彼らといっしょに出かけた。彼らは、ヨルダン川に着くと、木を切り倒した。」エリシャは預言者の仲間たちと一緒にでかけました。おそらくは、作業に参加、協力することができるような、いでたちであったでしょう。ギルガルからだとするところと5キロぐらいですから、一時間余りはかかったでしょう。やがて、ヨルダン川に着くと、木の植わっている地域に入りました。そして、彼らは木を切り倒し始めました。ヨルダン川の際には、木がたくさん植わっていたようです。

### 3. 斧の頭を取り戻し (5~7節)

①斧の頭を水の中に (5)「ひとりが材木を倒しているとき、斧の頭を水の中に落としてしまった。彼は叫んで言った。『ああ、わが主。あれは借り物です。』」ところが、預言者仲間の一人が梁にする木を倒している時に、切り倒す道具である斧の頭を、ヨルダン川の水の中に落としてしまったのです。彼は叫びました。「大変だ!」「ああ、わが主よ」。これは主なる神というよりは、エリシャに向かっての言葉だと考えられます。「ああ、先生」と言った意味でしょう。「あれは借り物なのです」。斧の頭の部分は鉄製だったと考えられます。高価なものです。その斧を彼は、この日のために、どこからか借りて来たのです。預言者の信用で借りて来たのです。ところが、それを川の中に落としてしまったのです。おそらくその時に、まずはそれを拾いだそうと試みたと思います。しかし、取り戻すには困難が伴うと思ったことでしょう。そして、これを失ったら、どれだけの経済的負担になるだろうか、それに貸してくれた人にどのようにお詫びしたら良いだろうかなどという思いが廻ったことでしょう。ちよろちよろと流れる川ではありません。それなりの深さがあります。かつてヨシュアがイスラエルの民を引き連れて、この川を渡った時、水はせき止められて歩きました。しかし、契約の箱をかつぐ者たちが渡り終わると、水は以前のようにその岸いっぱいになったという記述があります (ヨシュア記4章)。

②斧の頭が浮かび (6)「神の人は言った。『どこに落としたのか。』彼がその場所を示すと、エリシャは一本の枝を切って、そこに投げ込み、斧の頭を浮かばせた。」ですから、そう簡単にその斧の頭の部分を見つけることはできません。潜水をして探すと言っても、ヨルダン川の水は濁っていたようですから、難しいですし、また川は流れて

いるのですから、命を落としかねません。そんな時に、預言者エリシャは尋ねたのです。「どこに落としたのか」。預言者仲間の一人がその場所を示すと、エリシャは一本の枝を、示された所に投げ込んだのです。すると、斧の頭が浮かんできました。重力の法則ではありえないと思われませんが、鉄製の斧の頭が浮かんできたのです。

③拾い上げ (7)「彼が、『それを拾い上げなさい。』と言ったので、その人は手を伸ばして、それを取り上げた。」す。エリシャの指示は、浮かんできた斧の頭を拾い上げることでした。その人は、手を伸ばして、それを拾い上げました。無事に取り戻すことができたのです。これで、貸してくれた人に、返すこともできます。ほっとしたことでしょう。

《結論》今朝の聖書記事は日常生活によくあるような出来事です。これまで記

されてきたエリシャの働きと比べると、人の生死にかかわることではありませ

ん。日々にその人を苦しめる病気や人生問題でもありません。また、魂の大問

題でもありません。しかし、それは人間の社会生活においては、悩ましい日常

の問題です。それを列王記は取り扱っているのです。

今朝の出来事は、預言者の仲間たちが、その住まいや働きの拠点を、より広い場所に移すために、働いていた最中に起きました。ここでは、働いていた預言者仲間のひとは、病気をしたのでもけがをしたわけでもありません。そうではなくて、働いていた時に用いる道具であった斧の頭を川に落としてしまったのです。斧の道具は当時としては、貴重な鉄製でありました。経済的にはそれなりに価値のある物でした。それも、それは借り物でしたから、彼にとってはショックなことでした。それは彼の叫びの中に表れています。「ああ、わが主。あれは借り物です!」。

ここにエリシャがいたということは、主の備えであったと言えるでしょう。エリ

シャは一本の枝を用いて、斧の頭を浮かび上がらせたのです。斧の頭を落と

した人も預言者仲間に入っていました。自分で何かできなかったのかとも思

いますが、エリシャはそうした人々の中でも特別な賜物を与えられていたとい

えます。エリシャはこの場所に、このことのために導かれていたのです。「主の

山に備えあり」です。私達にも主は必要な時に、その時に必要な人や

物や状

況を備え、問題に解決を与えてくださいます。このことを信じていきましょう。

二つ目に、言えることは、主は私達の極めて日常的なことにも関心を持ってくださっているということです。イエス様も、お腹を空かせている多くの人々へのご配慮をしてくださいました。私達も極めて日常的なことで、困ったことを主に申し上げていくことは許されているのです。日常的なことは自分の力で片づけ、難しいことは神に頼るというのではなく、生活のすべての領域において、主にお頼りしていくのです。

三つ目に何かを失ってしまった時に、私達は悩むでしょう。物質、品々はもちろん、情報などを失うこともあります。今日ではカードや電子器具などを失うこともあるでしょう。また自分の名誉を失うこともあるかもしれません。主イエス様は、迷子になった子羊の話、失われた銀貨、放蕩に出てしまった息子のたとえ話をされました。そこでは、人が主なる神から離れてしまっている時に、手を差し伸べてくださる神の愛を教えてくださいました。また、失われることの痛みにも同情してくださっています。失った時は、ショックもあるでしょう。叫びたくもなるでしょう。でも、迷子になった子羊を羊飼いが捜してくれていたように、主はあなたの失われた何かをともに、捜して下さいます。失った痛みや苦しみを主に申し上げます。

讚美歌 391 の3番には、怖れる者に平安を、嘆く者に望みを、主に申し上げることで、主の深い恵みをいただいていく、という歌詞となっています。小さなできごとをも主に委ね、祈りながら進んでいく。失われたもののことも、主に助けも留めつつ、委ねて歩いていきましょう。